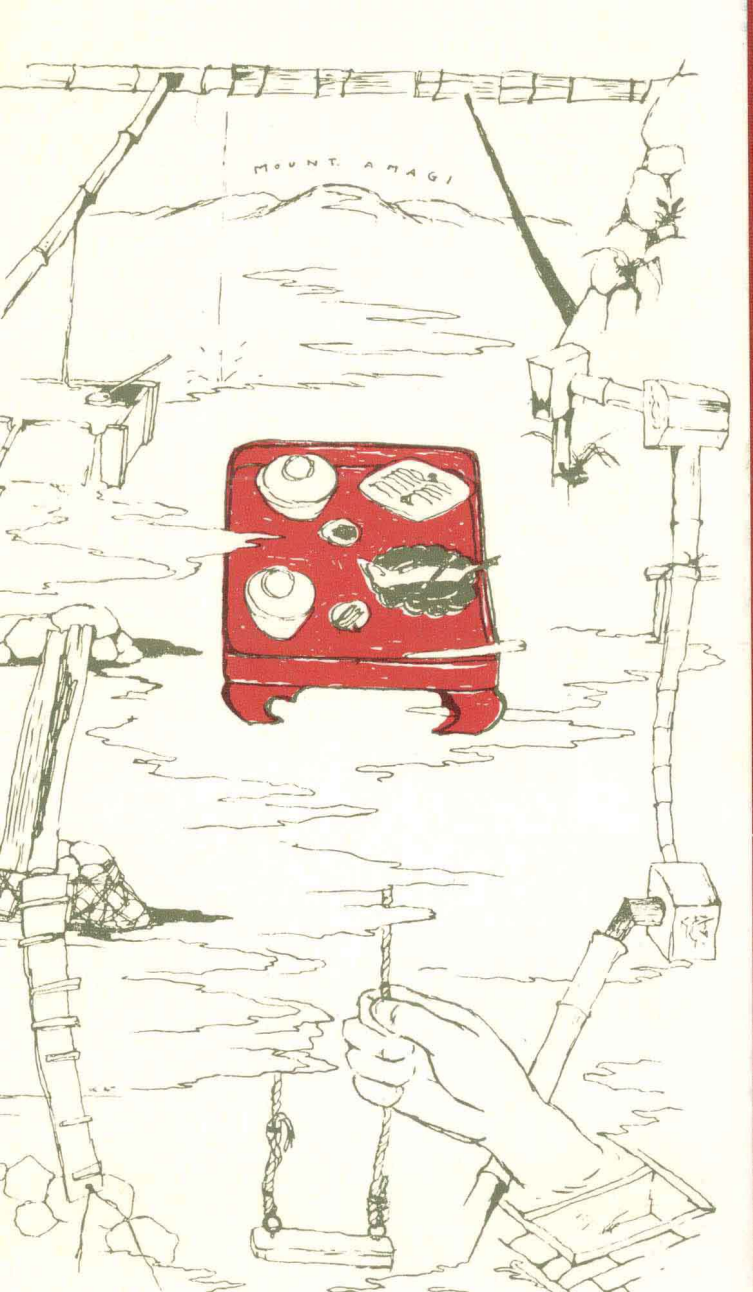
MOUNT. AMAGI

Ken

昭和貳年三月十五日印刷
昭和貳年三月二十日發行

伊豆の踊子
定價金壹圓五拾錢

著作者　川端康成

發行者　東京市神田區今川小路一丁目四番地　福岡益雄

印刷者　東京市牛込區早稻田鶴巻町三六二番地　關根慶寛

印刷所　東京市牛込區早稻田鶴巻町三六二番地　金星堂印刷所

發行所　東京市神田區今川小路一丁目　金星堂
電話九段二九六九番
振替東京三三二八番

新選　名著複刻全集　近代文学館

目次

白い滿月……一
招魂祭一景……六
孤兒の感情……九
驢馬に乘る妻……一三
葬式の名人……一四
犧牲の花嫁……一五
十六歳の日記……一七
青い海黑い海……二二
五月の幻……二五
伊豆の踊子……二七

白い満月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

1

姉の眼は澄んでゐるが、妹の眼は濁つてゐる。妹の眼は彼女が父から受けたらしい惡い遺傳を感じさせる。母は死んでゐる。姉娘は村の桶屋へ嫁入りしてゐる。父は北海道の山へ出稼ぎに行つてゐる。私が妹娘を雇入れたのは五月だつた。五月にこの娘は少し耳が遠くなる。夏はよく聞えて九月の末にまた少し惡くなるのださうだ。こちらが小聲でものを云ふと、左の肩毛を上げて首を突出しながら、「へえつ？」とびつくりしたやうに聞返す癖がある。

「河鹿が時々變に聞えるんですよ。」

「變て、どんな風に？」

「云へませんね。」

「そりやさうさ。河鹿の鳴聲の眞似は出來やしない。」

「出來ませんね。」

「時々聞えなくなるのか。」

「さうぢやありません。まあ、河鹿の聲は、かうお月さんの光りに浮いてゐるやうに聞えますでせう。それが時々地の底へ沈み込むやうに聞えるんです。」

「なかなかうまいことを云ふね。」

「それがほんとですもの。さういふ日は耳が惡いんですから、大きい聲でものをおつしやつて下さい。」

「だつて、君の耳に河鹿の聲がどう聞えてゐるか、僕には分りやしない。」

「分りませんね。」

「今夜はどうなんだ。」

「お月さんの光りに浮いてゐます。」

彼女が云ふ通り谷川は五月の月明だつた。その夜はこの娘を雇入れてから四五日目だつたと思ふが、彼女が初めて來た日、私は第一番に云つたのだつた。

「僕の病氣のことは知つてゐるね。」
「聞いて來ました。」
「なんて聞いて來た。うつらないとも限らないんだが、それでも來てくれるかね。ほんとを云へば、誰にも來てくれとは頼めないんだが。」
「どうせ私なんかどうなつたつていいんです。」
「ええ?」
「私のことなんかいいんです。」
「そりや困る。そんなこと云ふやうでは來てもらへない。」
「でも、それがほんとですもの。」
「どうして。」
「死んだつていい人間は澤山あると思ひます。」
私は何かで叩かれたやうに驚いて、笑ひにまぎらはしながら云つた。
「それぢや君は、死ぬ覺悟で僕のところに來てくれるのかね。」

「まさか。」

「しかし、ほんとに來てもらつていいのか。」

「役に立ちませんでせうけれども置いて下さい。肺病なんか私にうつるとは思ひませんね。」

「そりやさうさ。それに僕はもう全快してゐるんだ。」

私のきつぱりとした調子に面喰つたのか、彼女は初めて眼を上げた。まともに見合せてもその眼の輪廓をはつきり捉へることが出來ないやうな病的な線を瞼が畫いてゐる。十七の娘としては異常に發達した太い胴と擴つた腰とはこれ以上脊の伸びないことを約束してゐるやうに見える。

「別に用事つて、澤山ない。掃除をするのと、三度々々宿屋から食事を運ぶのと、それくらゐのもんだ。夜は泊らずに通つてくれてもいい。」

「泊めていただけないんだと困ります。」

「そりやそのはうがこつちもいいんだが。」

そこで早速私は湯殿の掃除をしてもらつた。温泉場の別莊だけに湯殿は何より立派だ。母屋から長い廊下を渡つて谷川の岸へ下りて行くと、そこに藁葺きの細長い一棟があつて、それぞれに一つの湯槽を持つた三つの湯殿が壁に區切られて並んでゐる。三つの湯槽には溫い湯が豐に溢れてゐる。湯殿の西は板敷きの部屋で、大きい姿見と圓いテエブルと籐椅子とがある。湯殿へ行く廊下の途中に、月見亭といふ板の額をかかげたあづまやが建つてゐる。日光の美しい時はそこの寢椅子に横はることにしてゐる。

新しい女中を湯殿へ案内するついでに、私は書物を持つてそのあづまやまで出て行つた。寢椅子にころがつてゐると、湯槽を洗ふ水の音が聞える。庭は石楠花の花盛りである。つつじの大きい造花のやうなこの花は、餘りに派手過ぎるのに匂ひがないためか、見てゐると空虛な感じがして私の氣に入らない。谷川の向ふ岸の蕨はすつかり伸びてしまつて若葉を擴げてゐる。杉林はもう午後らしく仄黑い落着きの中に默りこくつてゐる。

女中が湯殿から廊下を渡つて來た。

「お湯が熱いですね。少し水を入れときましようか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

「いいよ。——君は病人のところにばかり奉公するんだね。それでも別莊は賑かだつたんだらう、大勢ゐて。」

別莊といふのは、東京の金持がこの温泉場に建てた廣大な邸宅のことである。土地の人は別莊と呼び習はしてゐる。

「さうですね。別莊番と、植木屋と、家庭教師と、女中さんが二人と、坊ちやんの世話をする番頭と、ほかにもまだゐます。」

「どうして別莊を止めたんだ。」

「坊つちやんが本を讀んぢや頭に惡いからでせう。」

「それが？」

「私が本を讀ませる役なんです。坊つちやんはからだがぐにやぐにやですから頁が剝れないでせう。私が傍についてゐて剝つて上げますんです。一日中本を讀んでゐました。」

「ふうん。ぢや君もずゐぶん本を讀んだね。」

「讀まずにはゐられないんですもの。」

「主にどんな本だ。」
「たいてい小説ですね。」
「しかし、君がゐなくなつても本を讀むことは止めやしないだらう。」
「さうですね。それでも、ほかの人では駄目でせう。坊つちやんがちやうどその頁を讀んでしまつた時にうまく剝らないと癇癪を起して猿のやうに泣くんです。ほかの人ではそれが出來ませんね。」
「坊つちやんはものも云へないのか。」
「猿のやうな聲を出すだけです。」
「つまり君が坊つちやんときちんと同じ早さで本を讀むのか。」
「さうですね。ほかの人では幾ら氣をつけてゐても、厚い本を讀むうちにはどこかで間違ひます。坊つちやんは讀んでゐるうちにいろんなことを考へますから、時によつて早かつたり遲かつたりするでせう。」
「それでも君は坊つちやんとすつかり同じ早さで讀めるのかね。」

「滅多に間違ひませんでした。」
「それぢや君は、坊つちやんの考へてゐることや、云ひたがつてゐることもすつかり分つたんだらう。」
「まさか。少しばかりしか分りません。それでも坊つちやんが、お夏、つて私を呼びたがつてる時は顔を見ないでも分りますね。」
「どうして？」
「どうしてつて。」
「長くゐたのかね、別莊には。」
「一年程です。」
「ぢやあ君は、僕が本を讀む時でもうまく剝れるかね。」
「さあ、どうですか。やつて見なければ分りませんね。」
「うん。それぢややつてみよう。いいかね。」
そして私は手に持つてゐた翻譯書を讀み出した。

（かの電光の不可思議なる惡戯は、正にこの種の顯著な特性を示してゐる。或時は電光は人間を一片の藁の如く燒盡した。或時は手袋を其儘に、中の手だけを灰にしてしまつた。電光は爐の火のやうに鐵の鎖を熔解してしまふ。しかもまた、一方には持つてゐた銃に感電せずして　獵師を燒殺してしまつた。或は皮膚を燒かずして耳環だけを熔かしてしまつた。或時は身體に何の傷害も與へずに、其衣類だけを燒いた。單に靴や帽子だけを破つた。子供が落雷した木の頂上から取つた卵の形を、彼の胸に寫した。六、七フイトも厚い壁は一瞬間に破壞された。百年も古い城は、忽ちにして燒かれた。火藥庫に落雷して——）

その瞬間、彼女は頁を剝つた。私は同じ頁の行から行へ移るやうに氣持よく、次の頁を讀んだ。

（爆裂は免れた。——）

2

杉林を抜けたり、岩の上を渡つたりして、谷川沿ひの小路を歩いてゐると、葉櫻の森の蔭に荒屋じみた小屋が見つかる。そのほの暗いなかで乳房の若々しい女が子供を抱いて、一人しみじみと温い湯に身を沈めてゐる。藁屋根の腐つた水車小屋の水しぶきに濡れて咲いてゐる薔薇のやうに、彼女はみづみづしい明るみをまはりに投げてゐる。また、竹林の麓の湯槽かゝ子供達が立上ると群雀が飛立つ。

こんな風にこの谷間は持主のないやうな温泉が三つも四つもあるほど湯の量が多いものだから、古い日本の風流を樂しんでゐる老人が建てたものとしては、私の借りてゐる別莊の湯殿も湯槽が三つもあつたりして、少し花々しくのさばり過ぎてゐるのである。けれども私はたいてい寢る前に一度は入るきりで、一日に二度といふことはあんまりない。熱が出やしないかとこはい。朝起き抜けに飛込んで湯槽の中で齒ブラシを銜へる愉快さは忘れられないのだが、さうして湯から上ると、谷川の向ふの杉林を見る眼に距離の感じがなくなつてしまひ、姿見の中の自分の姿が消えてしまふのだ。この輕い目まひはひしひしと自分の不健康を感じさせるので、朝の湯は止めることにしてゐる。

しかし、毎月きまつて三四日づつ私はこの貧血におびやかされるのである。たとへば、うつむいて路を歩いてゐる。ふと眼を上げる。薄曇りの夕暮のやうな氣がする。山々と自分の眼との間の聯絡が妙に失はれてゐて、遠い山と近い山との區別がなくなり、風景が空氣のない世界で靜まり返つてゐるやうに見える。はつきり眺めようとして瞬くと、瞼が疲れてゐて寒い。私はしをしをとうつむいて憂鬱と孤獨とを感じる。

實のところ私は、一月に一度づつ週期的にやつて來るこの身體の變調を、病氣のためではなく孤獨のせゐではなからうかと思つてゐるのだ。山へ來てから七ケ月といふもの、全く私は孤獨に暮してゐたのだ。

お夏を雇ふまでは、溫泉宿の女中が朝飯を運んで來たついでに、寢床を上げて行つてくれ、夕飯を持つて來た時に寢床を取つて行つてくれるだけで、六間の家に私一人で暮してゐたのだ。手紙さへも下の妹の靜江から毎月金を送つてくれるほかは殆ど來ない。私のはうからも出さない。二三年前の一つの經驗を思ひ出すと、出す氣がしない。

——その頃私はまだ學生だつたが、ある日銀座で知合ひの奥さんに出會つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo